

# 日本近代文学における自筆資料の構造的記述の可能性

## —江戸川乱歩自筆資料を手がかりとして—

塩井 祥子（早稲田大学大学院 文学研究科）

永崎 研宣（人文情報学研究所）

**概要：**日本近代文学分野でも自筆資料のデジタル画像が公開され、デジタル化の利点であるアクセスの容易さが確保されつつある。しかし、自筆資料には作家の執筆過程という動的な側面もあり、この提示に関しては不十分な水準に留まっていることから、更なる方法の検討が必要である。本論文では既実践例がある TEI ガイドラインを用いて江戸川乱歩の自筆資料の構造的記述を行う。本稿で扱う資料は、一冊の日記帳の中に異なるジャンルの複数文書が混在している。作家の執筆過程の表現のため、一つの文書内における書き直し等の前後関係と複数の文書の執筆の前後関係、つまり水準の違う前後関係を全体の執筆過程として取り扱うための具体的なマークアップを提案する。

**キーワード：**TEI ガイドライン、草稿、日記、自筆資料

## Possibility of Structural Description for hand written materials of modern Japanese literature: Using Rampo Edogawa's hand written materials

Sachiko Shioi (Faculty of Letters, Arts and Sciences, Graduate school of Waseda University)

Kiyonori Nagasaki (International Institute for Digital Humanities)

**Abstract:** In modern Japanese literature studies, digital facsimiles of novelists's hand written materials were become available. And consequently, it is easy to access their source materials. However, these materials have a dynamic aspect of novelists's writing process. Regarding these presentations, problems remain, therefore more consideration of method are need. we conduct structural description using TEI for hand written materials of Rampo Edogawa. The materials we use contain various documents with different genre. As a means to represent writing process, this research proposes a mark-up method to consider the context of different temporal levels, that is, context of revision in one document and of writing various documents as the entire writing process.

**Keywords:** TEI, manuscripts, diary, hand written material

### 1. まえがき

デジタル時代の進展とともに、人文学においてもデータ駆動型研究の可能性が模索されるようになった。こと日本文学研究に関しては、国文学研究資料館が古典籍データ駆動研究センターを設立するに至っている。日本近代文学研究においてもこの種の取組みは進展しつつあり、なかでも、膨大かつ多様な資料が残されている江戸川乱歩は、デジタル人文学の実践の場にもなっている。2021年、立教大学人文情報センターのいどころプロジェクトによる「江戸川乱歩デジタルアーカイブ」の公開は、インターネットを通じて同大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターが所蔵する資料等へのアクセスを容易にした[1]。しかし、寄託資料として保管されている自筆資料は現在もデジタル化されておらず、文字資料のデジタル環境における取り扱いについては課題が残る。

自筆資料のデジタル化について更に述べるならば、日本近代文学の自筆資料等のデータベースは資料画像のみを表示する形態が主流である。デジタル化の利点である資料へのアクセス性という点では意義がある一方で、その自筆資料がどのような執筆過程を経て成立したのかという資料の動的な側面の提示という観点からは不十分な水準に留まっている。デジタル環境での *genetic editing* に取り組む Elena Pierazzo は *digital documentary edition* に解釈ツールとしての役割やその他多様な用途があることを述べている[2]。そうした議論を踏まえると、自筆資料をただ提示するだけでなく、動的な側面に関する表現の方法を探っていくことが望ましい。その方法を検討する上で、候補として TEI ガイドライン（以下、TEI）があげられる[3]。TEI は人文学テキスト資料を扱う際の構造化のガイドラインの1つである。本ガイドラインには以下の二つ

のアドバンテージがある。一つ目として、西洋において広く利用されているため、日本の人文学研究の国際化を考える上での有用性が挙げられる。これに関しては既に Pierazzo の TEI に基づく XML データを用いた草稿の動的な側面に関する表現の成功例がある[4]。二つ目として、じんもんこん 2013 のイベントにて杉浦静が富永太郎草稿資料への適用の可能性を提言していることから[5]、日本近代文学資料への適用可能性が挙げられる。以上のことから、TEI に基づいてテキストデータを作成することが適当である。

2013 年の杉浦の提言以降、TEI に基づいた日本近代文学分野資料の構造的記述は行われていなかったが、筆者らは江戸川乱歩のデビュー作である「二銭銅貨」の草稿を用いて基礎的な検討を既に行った[6]。

なお前掲発表は、あくまでも草稿という同一の文書内での検討であり、草稿を含む複数の文書を横断した執筆過程の構造的記述は未検討である。文書横断的な執筆過程の構造的記述については、Brett Barney の研究があるが[7]、TEI に加えて RDF と有向非循環グラフを利用した方法を採用しているため、TEI を用いた構造的記述に関しては不十分な点が残る。

以上のことから、筆者らの取組みは日本近代文学分野への適用可能性と、時間的連続性のある複数の自筆資料への適用可能性の検討という二つの観点から有用である。本研究発表では、TEI に準拠した取組みの現状と可能性、それを通じて得られた課題について検討する。

## 2. 江戸川乱歩日記自筆資料の概要

乱歩の自筆資料には、立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターが所蔵するもの以外にも乱歩の遺族である平井憲太郎氏が保管しているものが存在する。特に注目すべきは 9 冊の市販の日記帳に書かれた自筆資料である。こちらの 9 冊は未公開資料であり、塩井が現在閲覧調査を行っている。

資料の構成を確認すると、日記帳の中に日記や草稿、作品のメモ、随筆と分類される文書が混在している。加えて、新聞の切抜きを貼り付けた頁や、挟み込み資料などがあり、極めて複雑な構造をしている。

内容面に着目すると、9 冊の日記帳は乱歩による乱歩の記録『貼雑年譜』の参考目録として記載されている。つまり日記帳は『貼雑』の一次資料と推測できる。そしてこの『貼雑』を参照しながら執筆されたのが『探偵小説四十年』である。『探偵小説四十年』は、乱歩の幼少時代の記述から始まって昭和 36 年に至るまでが書かれている。乱歩の「一生を探偵小説に終始した一人の作家の記録として、(中略)世の探偵小説愛好家の書架におくる」という自序の通り[8]、各年度の探偵小説関連の出来事が詳述されているため、乱歩個人の人生の記録に留まらず、日本の探偵小説史にもなっている。従って、日本の探偵小説史を論じる場合、必ずといっていい程参照される資料である。そのため、『探偵小説四十年』の一次資料の一次資料ともいえるこの 9 冊の日記帳は極めて重要と言える。

表 1 『大正 11 年日記』構成(一部抜粋)

日記の日付 <sup>Ⓔ</sup>	内容 <sup>Ⓔ</sup>	実際に書かれた日付 <sup>Ⓔ</sup>
1月1日 <sup>Ⓔ</sup>	日記(正月どう過ごしたかについて) <sup>Ⓔ</sup>	日付通り <sup>Ⓔ</sup>
1月1日 <sup>Ⓔ</sup>	親と子について(非日記) <sup>Ⓔ</sup>	T11.1.13 <sup>Ⓔ</sup>
1月2日 <sup>Ⓔ</sup>	<sup>Ⓔ</sup>	<sup>Ⓔ</sup>
1月3日 <sup>Ⓔ</sup>	日記(上の段のみ) <sup>Ⓔ</sup>	日付通り <sup>Ⓔ</sup>
1月4日 <sup>Ⓔ</sup>	日記(上の段のみ) <sup>Ⓔ</sup>	日付通り <sup>Ⓔ</sup>
1月5日 <sup>Ⓔ</sup>	日記(上の段のみ) <sup>Ⓔ</sup>	日付通り <sup>Ⓔ</sup>
1月6日 <sup>Ⓔ</sup>	日記(上の段のみ) <sup>Ⓔ</sup> マルキシズムの根本問題 <sup>Ⓔ</sup>	日付通り <sup>Ⓔ</sup> T11.10.24 <sup>Ⓔ</sup>
1月7日~11日 <sup>Ⓔ</sup>	日記 <sup>Ⓔ</sup>	日付通り <sup>Ⓔ</sup>
1月12日~26日 <sup>Ⓔ</sup>	日記 <sup>Ⓔ</sup>	日付通り <sup>Ⓔ</sup>
中略 <sup>Ⓔ</sup>		
2月20日 <sup>Ⓔ</sup>	大阪の守口の家の図 <sup>Ⓔ</sup>	T11.7以降 <sup>Ⓔ</sup>
2月21日~3月4日 <sup>Ⓔ</sup>	「detective stories continued」青文字部分 <sup>Ⓔ</sup> 「detective stories continued」黒文字部分 <sup>Ⓔ</sup>	T11.7.6以降 <sup>Ⓔ</sup> T11.9以降 <sup>Ⓔ</sup>
3月5日 <sup>Ⓔ</sup>	馬場孤蝶の講演についてのメモ書き <sup>Ⓔ</sup> 新聞の切抜き「英米七人集」広告 <sup>Ⓔ</sup>	T11.9.17以降 <sup>Ⓔ</sup>
3月6日~7日 <sup>Ⓔ</sup>	裁判と警察に関するメモ書き <sup>Ⓔ</sup>	T12.2.22より前 <sup>Ⓔ</sup>
3月8日~28日 <sup>Ⓔ</sup>	草稿(「千人殺し」) <sup>Ⓔ</sup>	T12.2.22 <sup>Ⓔ</sup>

### 3. 『大正11年日記』の特徴

本発表では、江戸川乱歩の自筆資料である日記帳9冊のうちの一つ、『大正11年日記』の構造的記述について議論するが、その前に資料の具体的な状態について触れておきたい。

『大正11年日記』は至誠堂、四六判『大正十一年自由日記』（大正10年11月1日発行）を使用する形で書かれている。罫線縦書き。同日記帳は、大正11年から大正12年の2月頃まで使用された。

日記帳の形態をしている以上、日付通りに頁を埋めていく使用方法が通常であるが、乱歩は特異な使い方をしている。表1で示すように、日記として通常通り使用している面もあるが、唐突に作品の草稿を書き始めている箇所（「千人殺し」）、探偵小説の書誌情報を書きつけるなどしてビブリオグラフィーとして使用する箇所（「detective stories continued」）、イラストを描いている箇所（大阪の守口の家の図）等、かなりの部分において日記帳として使用していない箇所が目立つ。また、日記帳もそうであるが手帳などにしても、基本的に前から順番に頁を使用するのが通常である。しかし、この資料において乱歩はそのような使い方をしていない。乱歩は日記を毎日書いていた訳ではないので、例えば、1月から2月半ばまでは毎日日記を書いたが、3月は全く書かなかったとなると、その時点で約ひと月分の空白頁が出来る。空白の頁には後から日記以外のジャンルの文書を書き（表1の「千人殺し」の日記帳の日付と実際に書かれた日付を参照）、また日記を書いて余った空白部分に後から別の文書を書く等を行っているのである（図1）。そのため、表1で

示すように、日記帳に予め記載された日付と、実際にその頁が使用された日付は一致しない場合が多い。以上のことから、文書のジャンルの多様性と日記帳使用の時系列の複雑さは表裏一体の関係にあることは言うまでもない。

### 4. 初期の江戸川乱歩研究の状況

日記帳は大正11年から大正12年の2月頃まで使用されていることから、乱歩のデビューが大正12年4月であることを踏まえると、乱歩の初期の創作活動を考えるにあたって重要な資料である。というのも、現在乱歩研究においては乱歩が提示した自己言及的枠組みをもう一度捉え直す必要性が訴えられている[9]。そのため、乱歩の編集を経る前の創作活動の痕跡は研究にあたって重要な意味を持つと考えられる。

また、作品の執筆過程である草稿は、執筆において作品が当初の目論見からは逸脱していく様子を示し、また逆に完成稿からは窺えない作家の狙いなどを暴き出す資料でもある。例えば、乱歩作品ではお馴染みの探偵・明智小五郎の初登場は「D坂の殺人事件」であったが、乱歩は明智をシリーズ化する意図はなかったと述べている。しかし落合教幸は草稿の執筆過程から明智が名探偵として準備されていたことを指摘し、乱歩の自作解説に疑問符を投げかけている[10]。このように作家によって編集される前の段階である草稿には様々な情報があり、研究史を覆し得るものとしての可能性を秘めていることが了解できる。従って、これらの研究に資する様に、どのような執筆の過程があったのか、まさに執筆の現場そのものの再現が重要である。

### 5. 構造的記述の留意点

3節、4節において述べた資料と研究の状況を踏まえて以下のような構造的記述の方針を立てた。

- (1) 自筆資料そのものを提示すること
- (2) 資料に書かれた内容だけでなく、日記帳の日付と実際に書かれた日付も加えること
- (3) 資料の種類ごとにおけることなく、全体の執筆過程を再現すること

(1)について、日記帳にはイラストや草稿も含まれているため、それを用いた研究の視点も踏まえて構造的記述を行わなければならない。イラストや図1で見受けられるような文字に対する装飾表現等はtranscriptionに困難があるので、資料そのものの画像を埋め込む必要がある。また、草稿研究では、加除訂正等を作家が行った際どのような記号を用いているか等のテキストの布置も問題になる。そのため可能な限り原資料そのものを再現することが求められる。江戸川乱歩の草稿の構造的記述については筆者らの試み[6]がある。また他の作家であればElena Pierazzoの事例等があ

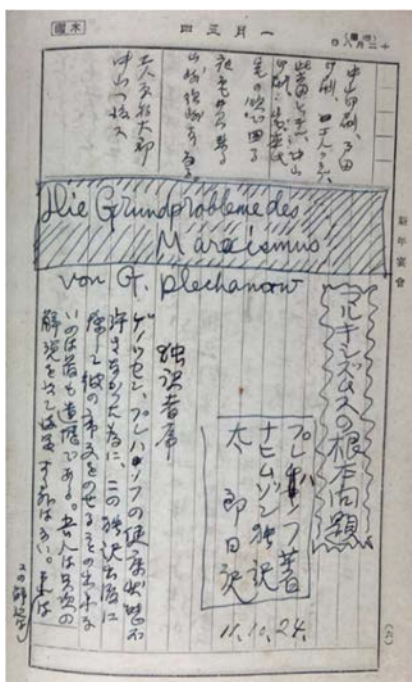


図1 「1月5日」頁において上部は1月5日に下部は10月24日に書かれている

る[4]. それらの事例を踏まえ本研究でも, TEI によって一次資料をマークアップする際の概念である Document-oriented Markup 実現のためのエレメントである<sourceDoc>を採用し, 筆記面の位置情報を示す<surface><graphic><zone><line>を用いた. 具体的には<graphic>タグを用いて資料の画像ファイル名を指定し, <zone>で対象領域を指定, <line>の区切りは資料画像の改行と合せる形で各行をマークアップした.

(2)について. 3 節で既述の通り, この資料の特徴として, 日記帳の日付と実際に書かれた日付が対応していないことが挙げられる(表 1 参照). この日記帳の日付と実際に書かれた日付が対応していない, という特徴を表現するため, <zone>タグで対象領域を指定する際は, 原則として日記帳の一頁に一つの対象領域とした. しかし, 図 1 のように一頁の中に異なる時期に書かれた文書が混在している場合は, 図 2 の様に一頁の中で日付ごとに<zone>タグで区切りを設けた. 次に<zone>タグ内において<note>を使用し, <date>の中に@when 属性で日記帳に予め書かれた日付を記載し, @type 属性を prepared とする. 以上のことを念頭において図 2 を説明する.

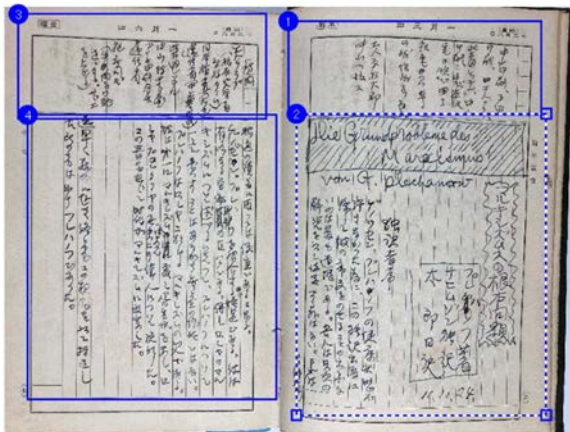


図 2 <zone>タグの対象領域例

図 2①は 1 月 5 日に書かれた日記②は 10 月 24 日に書かれた翻訳③は 1 月 6 日に書かれた日記④は 10 月 24 日に書かれた翻訳(②の続き)となっている. 以下は①と②のマークアップ例である.

```
<surface>
  <graphic url="IMG_1842.HEIC"/>
  <zone xml:id="ch8" lry="792"
    lrx="3835" uly="100" ulx="2035">
    <note>
      <date when="1922-01-05" type="prepared"/>
    </note>
    <line>中山印刷, 戸田<line>印刷, ●工人クラブ, </line>
    <line>口口レットル, 中山印刷, 安本氏</line>
    <line>宅の順で回る</line>
    <line>夜亀井君来る</line>
  </zone>
  <zone xml:id="ch9" lry="3064"
    lrx="3864" uly="793" ulx="2028">
    <note>
      <date when="1922-01-05" type="prepared"/>
    </note>
```

```
<line> マルキシズムの根本問題</line>
<line>ブレハノフ著</line>
<line>ナヒムソン独訳</line>
<line>太郎日訳</line>
<line>独訳者序</line>
<line>ゲノツセン, ブレハ●ノフの健康状態が</line>
<line>許さなかつた為に, この独訳出版に</line>
<line>際して彼の序文をのせつことの出来な</line>
<line>いは最も遺憾である. 吾人は只次の</line>
<line>解説を以て満足する外はない. <del>それ</del>
  <add>この解説</add>は</line>
</zone>
```

また, 明確な日付が不明の場合は@notBefore 属性及び@notAfter 属性を用いて上限・下限の日付を記述することで前後関係を示すことができる. 下記の図 3 は「3 月 1 日」頁に書かれた乱歩のビブリオグラフィーの一部であるが作成日時に関する情報がない. しかし, 青ペンで書かれた「第七編 呪の狼」は探偵傑作叢書として博文館から大正 11 年の 7 月 6 日に発行されたので, 正確な作成時期は不明であるが発売日以降に書かれたことはわかる. 「第八編 義賊ラッフルス ホーナング 田中早苗」は大正 11 年 9 月に出版されたのでそれよりも後に書かれたことが了解できる.

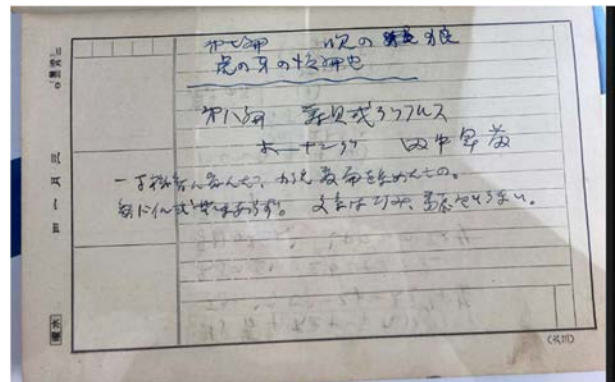


図 3 ビブリオグラフィーの一部

マークアップ例は以下の通りである.

```
<graphic url="IMG_1870.HEIC"/>
<zone/>
<zone xml:id="ch71-1" lry="2980"
  lrx="1880" uly="160" ulx="1520">
  <note><date when="1922-03-01" type="prepared"/></note>
  <line>第七編 呪いの<del>狼</del>狼</line>
  <line>虎の牙の続編也</line>
</zone>
<zone xml:id="ch71-2" lry="2940"
  lrx="1520" uly="50" ulx="50">
  <note><date when="1922-03-01" type="prepared"/></note>
  <line>第八編 義賊ラッフルス</line>
  <line>ホーナング 田中早苗</line>
  <line>一寸機智に富んだ? 小説数編をまとめたもの.</line>
  <line>●ドイル式興味あらず.</line>
</zone>
```

以上の時系列を<teiHeader>内の<profileDesc>にある<creation>に含まれるテキストの改訂に関する情報をグループ化する<listChange>タグと具体的な改訂を説明する<change>タグを用いて記述すると図 4 の様になる.

<zone>の後の<note>タグ内の<date>タグのpreparedに対応する形で<change>タグ内の<date>タグに@typeでcreatedと記述し、実際に作成された年月日を記述した.ch1からch10までの5つは日記であるが、ch71-1, ch71-2はビブリオグラフィ、ch9, ch11は翻訳である。それぞれ異なるジャンルの文書であるが、『大正11年日記』という一つの資料の成立の時系列として表現が可能である。このような形をとることで(3)の資料の種類ごとにわけることなく、全体の執筆過程を表現することが出来る。

```
<listChange n="全体" type="diary">
  <change target="#ch1"><date when="1922-01-01" type="created"/></change>
  <change target="#ch4"><date when="1922-01-03" type="created"/></change>
  <change target="#ch5"><date when="1922-01-04" type="created"/></change>
  <change target="#ch8"><date when="1922-01-05" type="created"/></change>
  <change target="#ch10"><date when="1922-01-06" type="created"/></change>
  <!-- 中略 -->
  <change target="#ch71-1"><date notBefore="1922-07-06" type="created"/></change>
  <change target="#ch71-2"><date notBefore="1922-09" type="created"/></change>
  <!-- 中略 -->
  <change target="#ch9"><date when="1922-10-24" type="created"/></change>
  <change target="#ch11"><date when="1922-10-24" type="created"/></change>
</listChange>
```

図4 執筆過程のマークアップ例

## 6. 文書内に独自の時系列がある場合

5節で扱った文書は文書内において時系列がほぼ存在しない。例えば、図3のビブリオグラフィは削除後の書き直しがあるが、それは即時の修正であり、文書作成時に行われたものと推察できる。しかし、『大正11年日記』内には文書内部で固有の時系列を持つものがあり、その代表例として草稿が挙げられる。

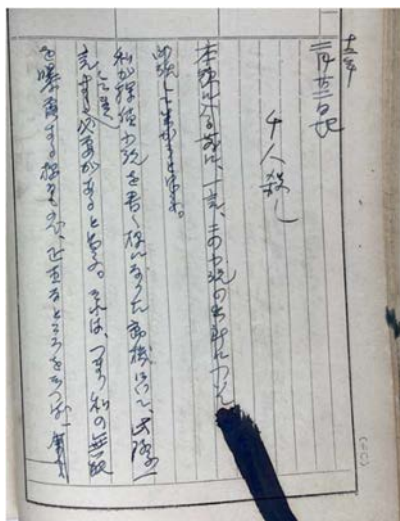


図5 草稿「千人殺し」冒頭部

```
<zone xml:id="ch78-1" lry="2906" lrx="3586" uly="664" ulx="3000">
  <note>
    <date type="prepared" when="1922-03-08"/>
  </note>
  <line>十二年</line>
  <line>二月廿二日起</line>
  <line>千人殺し</line>
  <line>
    <delSpan spanTo="#a1" xml:id="a1"/>本題に入る前に、一言、この小説の出所について</line>
  <line>御話ししておかうと思ふ。<anchor xml:id="a1"/>
</line></zone>
<zone xml:id="ch78-2" lry="2878" lrx="2971" uly="707" ulx="1950">
  <note>
    <date type="prepared" when="1922-03-08"/>
  </note>
  <line>私が探偵小説を書く様になつた動機について、
  此際一</line><delSpan spanTo="#a3-1" xml:id="a3-1">する</delSpan>
  <add xml:id="a3-2">して置く</add>必要があると思ふ。
  それは、つまり私の無能</line>
  <delSpan spanTo="#a2" xml:id="a2">余り</delSpan>
  <delSpan spanTo="#a2e" xml:id="a2e">余り</delSpan>
</zone>
```

図5からも明らかであるように、この草稿の執筆には時系列がある。例えば図5の1行目、2行目は、3行目を書き始める前の段階で取消し線が引かれたことがその内容から読み取ることが出来る。また、4行目の「言する必要がある」という部分は書かれて即座に「する」が消されたのではなく、一度ある程度書き進められてから、推敲時に消去され、「して置く」と書き改められた可能性が高い。なぜなら即座に書き改められた場合、「する」の直後に「して置く」が書き込まれるはずであるが、右余白に書き込まれているからである。実際、乱歩の草稿では即座に書き改めたと考えられるものは取消し線が引かれた表現の直後にそれに代わる別の表現が書き込まれている。

このようにこの草稿内では、書く→書き直しといった執筆の時系列があることが了解できる。そのため以下の様な形で、執筆の時系列を表す。

```
<listChange n="千人殺し" type="manuscript" xml:id="L5">
  <change target="#ch78-1"><date when="1923-02-22" type="created"/></change>
  <change target="#a1"><date when="1923-02-22" type="created"/></change>
  <change target="#ch78-2"><date when="1923-02-22" type="created"/></change>
  <change target="#ch78-3"><date when="1923-02-22" type="created"/></change>
  <change target="#a2"><date when="1923-02-22" type="created"/></change>
  <change target="#a3-1"><date when="1923-02-22" type="created"/></change>
  <change target="#a3-2"><date when="1923-02-22" type="created"/></change>
</listChange>
```

## 7. 文書内の時系列と各文書間の時系列

6節の<listChange>と<change>で表されている時系列は5節で述べた『大正11年日記』全体の

時系列とは別の種類のものである。5節で述べた時系列はあくまでも各文書の作成日時を基準とした時間的前後関係であり、6節で述べた時系列は文書内部における書き直し等の痕跡から窺える時間的前後関係である。

もし、これらの時系列の違いを区別しない場合、次の様な問題が想定される。例えば表1を参照すると、1月13日に随筆「親と子について」(ch2~ch7)が書かれ、この文書には「1月1日」~「1月4日」頁分が費やされている。また、この随筆と同じ日に1月13日分の日記(ch18)も書かれており、どちらが先に執筆されたか不明である。これら2つの文書の前後関係が判明しないことから<change>タグ内において並列しなければならない。しかし、「親と子について」は複数の<zone>から構成され(言い換えると日記帳が数頁費やされている)、かつ<zone>間の時系列が明らかである(図6参照)。

```
<listChange n="writing 親と子について"
  type="essay" xml:id="L2">
  <change target="#ch2"><date when="1922-01-13"
    type="created"/></change>
  <change target="#ch3"><date when="1922-01-13"
    type="created"/></change>
  <change target="#ch6"><date when="1922-01-13"
    type="created"/></change>
  <change target="#ch7"><date when="1922-01-13"
    type="created"/></change>
</listChange>
```

図6 「親と子について」の時系列

そのため、もしそのまま並列すると、「親と子について」の文書内部における時系列の表現が不可能となる(図7の不適切な例参照)。

```
<change target="#ch18 #ch2 #ch3 #ch6 #ch7">
  <date when="1922-01-13" type="created"/></change>
```

図7 不適切な例

このような場合に対応するためには日記以外の文書は文書ごとに<listChange>と<change>で文書内部の時系列を別個にまとめてから、その<listChange>にidを割り振ることで(図6のxml:id参照)、下記のような形で全体の時系列に組み込むという方法がより適切と考えられる。

```
| <change target="#ch18 #L2">
  <date when="1922-01-13" type="created"/></change>
```

## 8. 結論と課題

以上、自筆資料そのものの再現と、日記帳の日付と実際に書かれた日付、全体の執筆過程の表現の3点に留意しながら構造的記述を行った。結果として、既存のスキーマで文書内部の執筆の時系列と各文書作成の時間的前後関係という2つの異なる時系列を統合し、全体の執筆過程として取り扱えることが了解できた。現在これらの資料は基本的に非公開であり、その関係で本研究で作成したデータも非公開ではあるが、将来的にはビューワの開発につなげることで、執筆過程を表示

できる形で公開したいと考えている。これを行うことで、日記帳9冊に記述のある年度については、乱歩自身にとって(『貼雑年譜』)、また日本の探偵小説史にとって(『探偵小説四十年』)どのような記録が重要なものとして採用されるに至ったのかその生成過程を追うことが可能となるだろう。加えて、日記帳内の初期の草稿は特に大正11年から大正13年の創作活動を研究する際に、新たな観点をもたらすものと考えられる。

また課題として、拡張性についての見通しが挙げられる。『大正11年日記』には乱歩が読んだ当時の探偵小説のタイトルがメモされている頁が複数ある。探偵小説の研究は大学の研究者に先んじて、探偵小説の愛好家によって牽引されてきた歴史を持つ。特に、探偵小説に関する書誌情報の整理は現在に至るまで続けられている。その現状を踏まえ、書誌情報をマークアップし、外部のデータと接続することが出来れば、近年その可能性が注目されているパブリック・ヒューマニティーズの一環に位置づけ得るものとして、研究利用の幅を広げることに繋がるだろう。

## 参考文献

- [1] いろいろプロジェクト：江戸川乱歩デジタルアーカイブ(オンライン), 入手先 <<https://rampo.net/>> (参照 2022-10-25)
- [2] Pierazzo, E.: Digital Documentary Editions and the Others, scholarly Editing: The Annual of the Association fir Documentary Editing, Volume35, pp.4-5 (2014).
- [3] The TEI Consortium: TEI: Text Encoding Initiative (online), available from <<https://tei-c.org/>> (accessed 2022-10-25).
- [4] Elena Pierazzo, Julie André: Autour d'une séquence et des notes du Cahier 46: enjeu du codage dans les brouillons de Proust (online), available from <[http://peterstokes.org/elena/proust\\_prototype/](http://peterstokes.org/elena/proust_prototype/)> (accessed 2022-10-25).
- [5] 杉浦静：富永太郎直筆原稿の画像データベース化による文学テキストの生成研究, 科学研究費助成事業研究成果報告書(2014).
- [6] 塩井祥子, 永崎研宣：TEIガイドラインに基づいた江戸川乱歩「二銭銅貨」草稿のマークアップの提案, 情報処理学会研究報告, Vol.2022-CH-130, No.4, pp.1-5 (2022).
- [7] Barney, B.: TEI, the Walt Whitman Archive, and the Test of Time, Journal of the Text Encoding Initiative Selected Papers from the 2018 TEI Conference, p.15 (2018).
- [8] 江戸川乱歩：江戸川乱歩全集第28巻探偵小説四十年(上), p.18, 光文社(2006).
- [9] 吉田司男(編)：探偵小説と日本近代, pp.9-30, 青弓社(2004).
- [10] 落合教幸：「依頼型」から「巻き込まれ型」へ—江戸川乱歩「D坂の殺人事件」草稿覚書一, 大衆文化, No.2, pp.37-43 (2009).